# 長岡で国際ワークショップ「21世紀、最初の大雪を経験して」開催

納口恭明
雪氷防災研究部門
総括主任研究員

21世紀が始まったばかりの2001年1月、東北・北陸各地で、10数年前の豪雪以来の雪の降りが記録されました。また、国外でもモンゴルやロシアなど世界各地から雪や寒冷の被害についてのニュースが舞い込んできました。幸い、国内の1月下旬以降の雪の降りはあまり激しくなく、大きな雪害にはなりませんでしたが、一時は久々の雪に慌てさせられた自治体も多かったのではないでしょうか。

大規模な雪の害は、毎年発生するものではありません。このため、久しぶりの雪の害に対処するためには、わずかではあっても経験の蓄積、情報の交換、およびそれを風化させずに継承することが必要です。

このため、防災科研長岡雪氷防災研究所は、去る9月20、21日の両日、新潟県長岡市の長岡市立中央図書館において、新潟県および長岡市との共催で「21世紀、最初の大雪を経験して」と題する国際ワークショップを開催しました。本ワークショップは自治体の雪氷関連実務担当者等による情報交換としての国内の事例発表（口頭発表9件、パネル展示17件）および、国際的な視点での外国人研究者による海外での雪氷、寒冷害の事例紹介（2件）を行なうとともに、このような大雪を生み出す気候・気象のメカニズムに関連した基調講演（2件）を行ないました。本ワークショップには2日間で合わせて190名の実務担当者、研究者、一般市民が参加しました。

講演および質疑の様子

基調講演では、東京大学の中村　尚氏から、近年の暖冬傾向が北半球規模の大気循環変動に伴うものであり、今回が大雪であるとはいえ全体としては暖冬傾向の中にあること、また現在が暖冬傾向だからといって豪雪は2度と来ないとはいえないことが説明されました。

気象研究所の村上正隆氏からは集中豪雪をもたらす擾乱の構造・メカニズム、および気象モデルを用いた人工降雨・降雪技術の研究の現状についての紹介がなされました。

また、海外からの2講師による事例紹介では、日本では考えられないようなモンゴルとロシアの災害事例が紹介されました。モンゴル自然環境省気象・水文研究所のゲレクピル・アディアバダム氏からはゾッドゥと呼ばれる災

害について紹介されました。ゾッドゥ災害はモンゴルにおける冬の寒冷や降雪、夏の水不足による家畜の被害をもたらす災害で、最近の２冬期に起こったゾッドゥ災害により大量の家畜が失われ、カシミア産業に多大の損害が及びました。

ロシア科学アカデミー航空・宇宙物理研究所のウラディミール・ソロヴィエフ氏からはロシアのヤクート共和国において、今冬の厳しい寒さにより凍結した河川が、春期に増水して洪水被害をもたらしたことについての報告がなされました。

国内事例紹介では福井、金沢、富山等での今冬の大雪の情況や各自治体の対応等について口頭発表があり、またパネル展示では90分間のコアタイムが熱い議論であっという間に過ぎてしまいました。最後の意見交換の中で、今後ともこのような情報交換の場が一般市民を含めてもっと多くの参加者を巻き込んで続けられるようにとの意見も寄せられ、２日間に渡るワークショップは閉会しました。

今回の大雪によって、久しぶりに雪の大変さを思い出した関係者、一般市民も多かったのではないでしょうか。その意味で、長く続いた暖冬傾向の中で、「21世紀、最初の大雪」は気のゆるみを正し、将来の雪氷防災を考えるきっかけとして重要な意味があったと思います。

国内事例発表のパネル展示の様子

防災科研では現在、雪氷防災関連研究プロジェクトとして「雪氷災害発生予測に関する研究」を実施しておりますが、今後とも多くの皆様のご意見を頂きながら雪氷防災研究を進めていきたいと考えております。

なお、本ワークショップでの主な演題と講師は以下のとおりです。

**基調講演（1）**
「近年の日本の暖冬傾向を北半球の気象から考える」中村　尚（東京大学大学院理学系研究科）

**基調講演（2）**
「日本海降雪雲のメカニズムとその人工調節技術の現状」村上正隆（気象研究所物理気象研究部）

**海外事例紹介（1）**
「過去２冬期にモンゴルで発生したゾッドゥ災害と、その社会経済発展に及ぼす影響」ゲレクピル・アディアバダム（モンゴル自然環境省　気象・水文研究所）

**海外事例紹介（2）**
「ヤクートにおける1998－2000年の河川洪水災害」ウラディミール・ソロヴィエフ（ロシア科学アカデミー航空・宇宙物理研究所）

**国内事例紹介**
口頭発表9件、パネル展示17件
参加者190名。

本ワークショップに参加された皆様に感謝の意を表する次第です。